Ⅰ 発掘調査に至る経緯

大井町は，首都圏３０Km圏内の県西南部に位置し，畑作を中心とする純農村地帯であったが，昭和４０年代のいわゆる地域開発ブームの渦中に，本町もさらされ，武蔵野の雑木林が工場に，畑地が宅地へと化していった。

〝だれもが住んでよかったといえる町〟をつくりあげていく上で，町のもっている歴史的・伝統的基盤を正しく継承していくことは必要であり，不可欠のものでもある。町づくりは，地域の歴史を十分に学び，それを更に発展，推進していくことが望まれているが，この点にも，埋蔵文化財の発掘調査・保存・活用は，大いに貢献していくことも必要であろう。

大井町に４０ヶ所ちかくの埋蔵文化財が確認されているが，これらは，すでに人々から忘れられて眠っているが，これらの遺跡は地域の悠久な歴史を語る私たちの財産であり，学校教育の大切な教材として，また，身近の歴史として，地域の発展過程をうつし出してくれている。

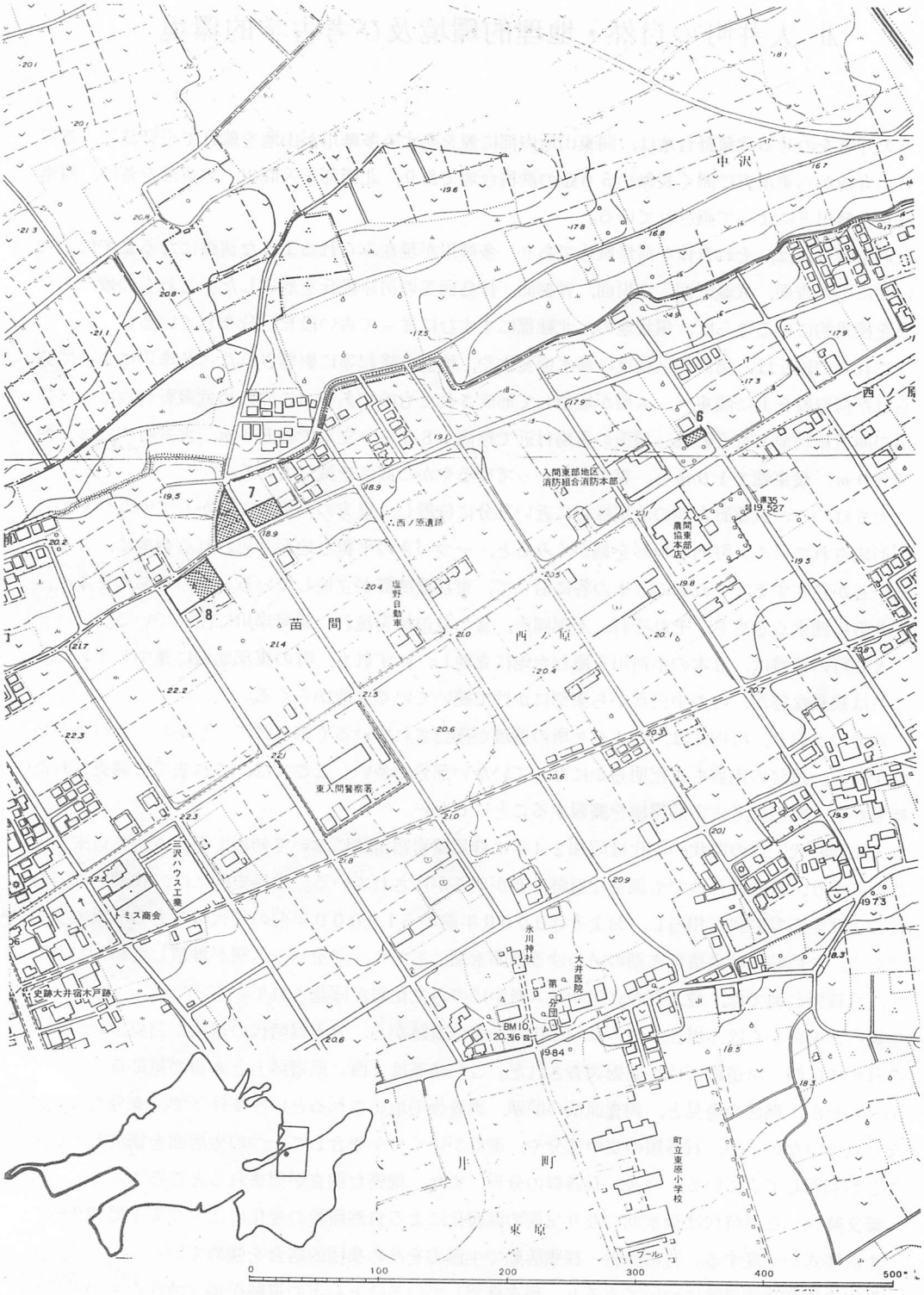
これらの地域開発の美名のもとによる都市化現象が，本遺跡群にも例外なく及んできており，ほとんどの遺跡が，滅失の危険にさらされている。

このため，本町では，埋蔵文化財保護の観点から，昭和５３年度から，第一次５ヶ年計画で，国庫及び県費補助による事業として，開発行為に先だち，遺跡の発掘調査を実施してきた。東部遺跡群の今年度の発掘調査の実施した遺跡名，所在地，原因者，面積，調査期間は，下表のとおりである。

開発の原因は，個人住宅建設４件，農地の転地返し３件の，計７件で，調査総面積4,257㎡ である。

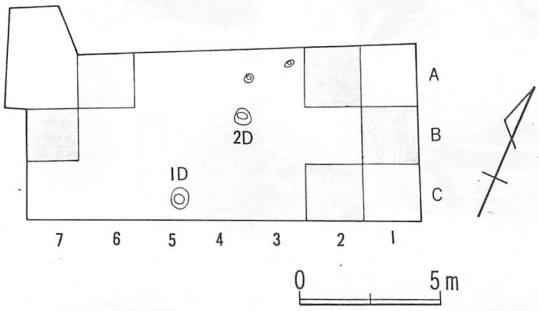
埋蔵文化財包蔵地における，このような蚕食的開発状況は，憂慮すべき事態にあり，新興住宅地として発展していく大井町に住む住民が大井をふるさとであるためには，豊かな自然環境の保存と共に，その歴史的環境，それは，大井町の歴史を形成してきた各種の埋蔵文化財の保存と活用を，これからの都市計画（町づくり）に位置づけていくことが求められてくるであろう。

	遺　跡　名	所　在　地	原因者	面積	調査期間
1	苗間東久保遺跡第３地点	大井町大字苗間字東久保642-11-12	堀井　昌平	200㎡	4.7
2	苗間東久保遺跡第４地点	〃　苗間字東久保642	堀井　昌平	750㎡	4.16～5.10
3	西ノ原遺跡第６地点	〃　苗間字西ノ原170－2	倉持幸次郎	450㎡	6.19～6.27
4	苗間東久保遺跡第５地点	〃　苗間字東久保636－3	宮元　恒枝	106㎡	9.8～9.24
5	西ノ原遺跡第７地点	〃　苗間字西ノ原96－1	野沢　久子	563㎡	10.1～10.29
6	西ノ原遺跡第８地点	〃　苗間字西ノ原95-2～3	塩野　良子	661㎡	10.30～11.14
7	苗間東久保遺跡第６地点	〃　苗間字東久保639	堀井　昌平	577㎡	11.27～12.26



第2図　西ノ原遺跡調査区と地形（ 1/5,000 ）（数字は調査地点）

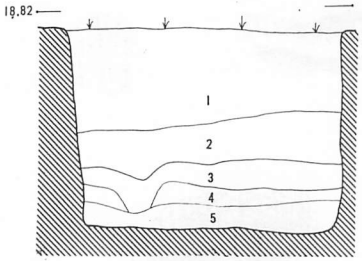
3．西ノ原遺跡第６地点



第13図　遺構分布図(1/300)

調査の概要と経過

西ノ原遺跡は，大井町と富士見市の境を流れる小河川（さかい川）によって開析された台地の南側に位置している。遺跡をのせる台地は標高２０ｍ前後，東西にのびる狭小な谷との比高差はほぼ６ｍを測る。遺跡の北方１００ｍのところ（富士見市）には，〝おとかやま〟がある。古墳ではないかという説もあり，科学的な調査が待たれるところである。



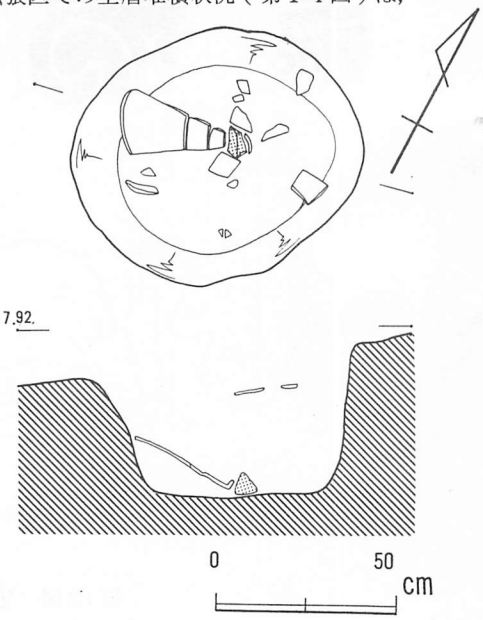
第14図
拡張区土壌堆積断面図（1/60）

西ノ原遺跡は，面積８0,0００㎡を有する縄文期の大集落であると想定され，これまでに５回の発掘調査が行なわれ，先土器時代・縄文時代前期・中期の遺構・遺物が確認されている。今回の調査により，さらに縄文時代後期前半の土器をともなう遺構が確認され，長い期間にわたる居住地であったことがうかがわれる。今回の調査区は，本遺跡の最東端に位置し，遺跡の範囲を確認するには，重要な調査となった。調査は，２ｍ方眼のグリッドを設定し，市松模様に掘り進んだ結果，土壙２基・柱穴２本を確認した。調査区は，ローム層までの堆積土が厚く，拡張区での土層堆積状況（第１４図）は，１が耕作土，２は黒っぽい土層，３はカワラケ片を含むしまりのある層で，４・５層は褐色土で非常にしまりのよい土層である。遺物量は非常に少なく，１号土壙内の遺物以外には，磨耗した土器片が数点出土したのみだった。

遺構と遺物

１号土壙（第１５図）

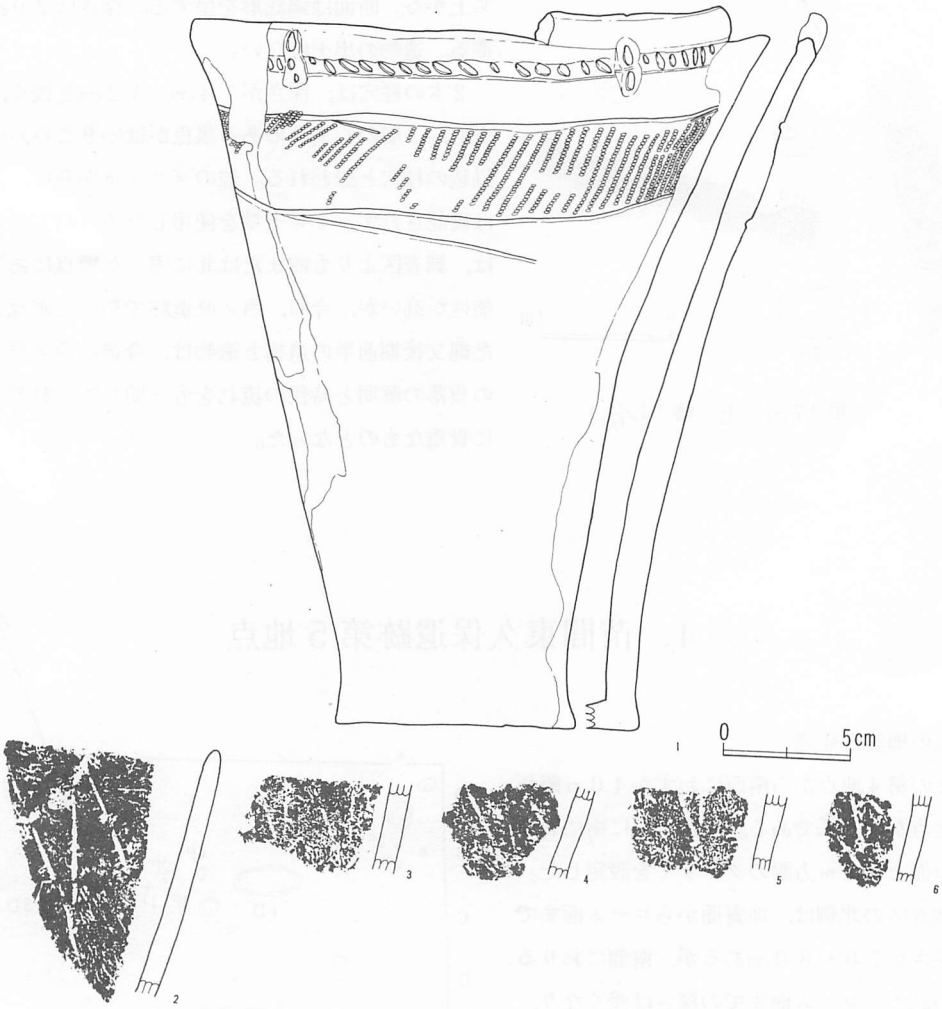
遺物が確認されたのは１号土壙だけである。Ｃ－５グリッドに位置している。平面形は，長径８０㎝，短径７０㎝のほぼ円形を呈し，壁は，東側は垂直に立ち上がるが，西側はゆるやかにあがる。深さは３５㎝を測る。壙底は平坦で壙内に，土器と礫が確認された。



第15図　１号土壙（1/30）

１号土壙出土土器（第１６図）

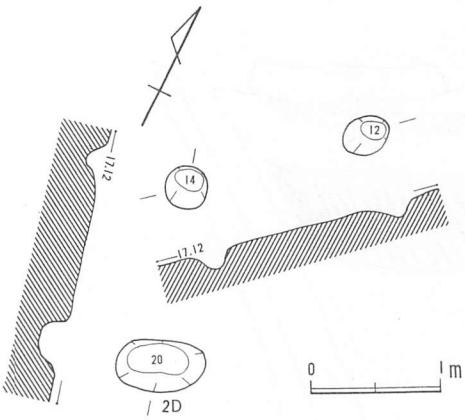
１は，口径２3.0㎝，器高２7.5㎝，底径9.5㎝。約$\frac{1}{2}$が欠損していた。口縁に向かって外反する深鉢で，底部が張



第16図　1号土壙出土土器（1/3）

り出す。口唇内面はわずかに突出している。帯状の把手（8cm）がつけられ，把手内面もわずかに突出している。胴部は箆状工具による縦位の整形痕が顕著に認められる。口唇部はよく研磨されている。文様は，口縁部の微隆起線上に細かい刻目を一列に連続させ，それと口唇部をつなぐように「8」字状の貼付文を加えている。横位の沈線によって画された間には，LRの縄文を充塡させてある。堀之内Ⅱ式に比定される土器である。2～6は同一個体で，斜位に沈線の走る土器である。

2号土壙（第１７図）



第17図　土　壙（1/60）

Ｂ－３・４グリッドに位置し，平面形は長径６５cm，短径４０cmの楕円形を呈し，壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面は鍋底形を呈する。深さは２０cmを測る。遺物の出土はない。

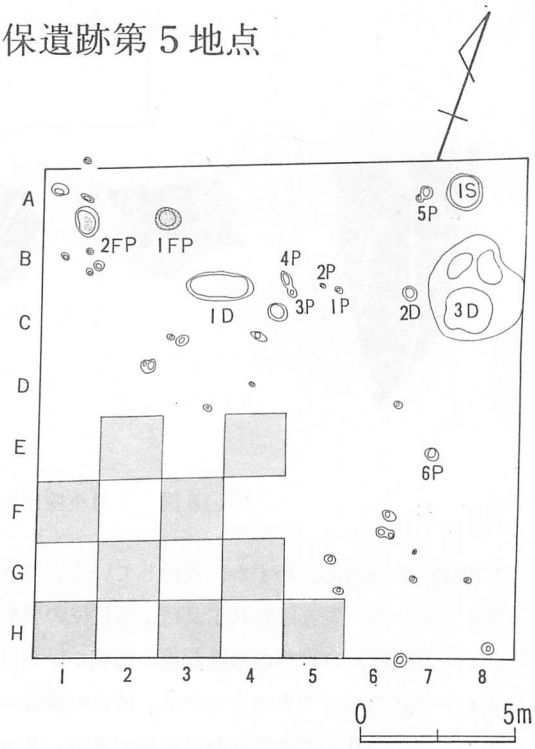
２本の柱穴は，深さが１４cm，１２cmと浅く，覆土も，３層のしまりのある黒色がはいりこみ，中世以後の柱穴と思われる。他のグリッドからは，遺構は確認されず，１号土壙を使用した人々の生活の跡は，調査区よりも西または北に寄った地点にある可能性が高いが，今回，西ノ原遺跡で初めて確認された縄文後期前半の遺構と遺物は，今後の西ノ原遺跡の集落の解明と時代の流れをも一助してくれる非常に貴重なものとなった。

4．苗間東久保遺跡第５地点

調査の概要と経過

２の第４地点から南西にわずか４０m離れた地点が調査区である。なだらかに南におりる斜面上に２m方眼のグリッドを設定した。

調査区の北側は，地表面からローム面までの深さが７０～８０cmあるが，南側におりるにつれて，ローム面までの深さは浅くなり，５０cm程度となる。遺構は，調査区の北側と，南東側に集中して検出された。今回の調査では，住居址は確認されず，土壙・柱穴が主要であった。遺物は比較的少なかった。第５地点は，第１地点と同様の地形にあり，第１地点も土壙・炉穴群の検出であり，今後の検討資料をもたらした。



第18図　遺構分布図（1/300）

図版2

西ノ原遺跡第６地点

(1) １号土坑

（北から）

(2) １号土坑

出土土器

苗間東久保遺跡第５地点

(1) １号集石